



# この人 2006

「教会と奴隷」の本を出した  
西山俊彦神父

『カトリック教会と奴隷貿易』という本がある。著者は大阪教区の西山俊彦神父。8歳のとき亡くなった父親の「神様のお役に立つように」との遺言が、いつも心の片隅にあった。それが、司祭を志したきっかけかも知れない、と言う。

「カトリック教会と奴隷」と聞いても、ほとんどの人には何それ？ というのが正直な反応ではないだろうか。

この難しいテーマに取り組んで、本にまとめた西山俊彦神父にとっては、どうしても避けて通れない問題だった。

西山神父が、奴隷と教会の問題を深く考えさせられたのはアフリカ訪問だった。1985年と1997年に自主研修でアフリカの現実を目の当たりにすることができた。そこで見た、あまりにも悲惨な状況に触れ、過去の奴隷制度に遠因があるのではないかと考えざるをえなくなった。

西山神父はこう書いている。「奴隷制がなければ綿花はない。綿花がなければ近代工業はない。奴隷制は植民地に価値を与え、植民地は世界貿易をつくりだし、世界貿易は機械制大工業（産業革命）の必須条件だった。」これは

カール・マルクスの言葉です。産業革命とともに近代資本主義は始まりました。産業革命を準備したのが奴隷貿易なら、近代資本主義は奴隷制を踏み台として始まったことになります」

こうした背景を考えると、現代の南北問題、富める国と貧しい国の格差も、分りやすい。しかし、現代社会は、こうした問題への関心も意識もないのが現状だ。

西山神父の本は、現代人が目を向けようにも気づかない過去の奴隷制度について、分かりやすく説いている。

過去の過ちとはいえ、奴隷制度に深くかかわったカトリック教会には、深い反省と謝罪が足りない、というのが西山神父の主張だ。公文書の『教会と人種主義』（1990）には「歴代の教皇や神学者、また多くの人道主義者たちは、こうした慣行に反対して立ち上がりました」と書かれているが、

不十分だという。

カトリック教会は、教会の名において、過去の奴隷制について明確な謝罪をしていない。

この本の中で西山神父が一番訴えたかったことは「現実を知り、福音の素晴らしさに目覚めよう」「平和の福音を信じて生きよう」だ。教会が完全に福音の真髄を体現しているわけではなく、非福音的な行為に与しなかったわけでもないことを、まず、認めなければならぬ、という。

西山神父の生まれは山形県酒田市。昭和22年、大阪・香里教会でジュピア神父の感化を受けて受洗。大阪公教小神学校から上智大学を経て、ローマ・ウルバノ大学に留学。さらにアメリカのセント・ルイス大学で社会学を学んだ。

〔西山神父の本〕  
『カトリック教会と奴隷貿易』  
（サンパウロ刊、1800円＋消費税）

「聖母の騎士」誌  
2006年6月号掲載